

「火を起こそう」

ライターやマッチのなかった昔の人はどのようにして火を起こしていたのでしょうか。それは木の棒を回転させてこすりあわせる^{まさつ}摩擦熱で火を起こしていたのです。では、どのような方法があるのでしょうか。

・もみぎり式

木の棒を両手でこすりあわせ、下に押し付けながら回転させて火を起こします。とても体力のいる方法ですが、上手な人は30分ほどでできるそうです。

現在のところ遺跡から確認されている唯一の方法で、最も古いものは縄文時代晩期（今から3000年ほど前）のものが北海道で出土しています。



・ひもぎり式

2人で火を起こす方法で、一人が棒の棒を押さえ、もう一人が棒に巻きつけたひもを交互に引いて回転させます。

まだ、遺跡から出土した例はありませんが、わりと簡単なしくみであり、イヌイトやアイヌなどの民族が使っていたことから、縄文や弥生時代でも使われた可能性があります。



・弓ぎり式

弓のツルに棒を巻きつけて、前後に動かすことによって回転させる方法で、一人でも簡単に火をつけることができます。

まだ、日本の遺跡から出土した例はありませんが、民族例やツタンカーメンの墓などで見つかっています。



・まいぎり式

石や木でできたはずみ車が軸についており、ひものついた横木（手をもつ部分）を上下することで、楽な力で勢いよくまわして火をつけます。

昔の火起こしといふとこの方法を思い浮かべる人がいると思いますが、実は江戸時代の中頃から神社の儀式で使われ始めたものです。しかし、静岡県の登呂遺跡（弥生時代）では手をもつ部分か？と考えられる木材が見つかっています。



◆火の起こし方（ひもぎり式）

1、軸にひもを回転ほど巻きつけて、一人が押さえ木で押さえます。ひもを引く人は交互にひもを引っ張って軸を回転させます。このとき、引っ張られるほうの手も少し引っ張ってひもをピンと張りましょう

上から押さえる人は体重を乗せてしっかり押さえましょう



2、回転を続けて、ケムリがもくもくと出てきたら火種ができています。軸をはずして、火種を吹き消さないようにそーと息を吹きましょう。しばらく吹き続けると真っ赤な火種が見えます。

強く吹きすぎると消えてしまいます。慣れない時は手のひらでおおぎましょう。



3、2でできた火種を麻の繊維やティッシュなどの燃えやすいもので包みます。火種を消さないように息をそーと吹き続けながら優しく包みます。

火種は熱いので直接さわらないで！！



4、包んだ火種を落ち葉や枯れ枝などの火がつきやすいものにおき、強めに息を吹き続けると、突然炎があがりだし、落ち葉などに燃え移って大きな炎になります。

突然炎が上がるので注意しましょう

